

坪田譲治の「タニシ」

藤井 倫明

はじめに

現在では伝統的な語りで昔話に触れたというひとは少なくなくなり、ほとんどが書籍などによって昔話を知っている。昔話は近代以降、「聴くもの」から「読むもの」に変わったとも言える。読む昔話は、多くが特定の作者によってなんらかの手が加えられ、再構成されている。そのため、現代における昔話への認識を知るためには、再構成された作品を知る必要がある。また、多くのひとが最初に昔話に触れるのは絵本や児童向けの昔話集などであり、とりわけ児童向けの文学作品（童話）として再構成された昔話の考察が重要であると考ええる。

昔話を童話化した人物のひとりとして代表的な作家に坪田譲治がいる。以前、坪田の童話化昔話に関して『口承文芸研究』第四十二号に論文としてまとめているが、そこでとりあげたのが坪田の童話化昔話集において、中期の集大成とも言える『新

百選日本むかしばなし』（以下『新百選』と表記）である。坪田の童話化昔話集においてもつとも整っているとされ、後の『坪田譲治全集十一』も『新百選』を中心に編纂されている。坪田の童話化昔話は原典となる資料があり、坪田自身による明記はないものの、当時存在した資料と見比べるなどして、原典を確定することが可能である。前回、『新百選』の収録話の原典をほぼ確認することができたが、ふたつの話だけ原典を確認することができなかった。そのふたつは、「桃太郎」そして「タニシ」という話である。「桃太郎」は、参考資料が多すぎる故、ひとつの原典に特定できないという事情であったが、「タニシ」は唯一、原典の候補となる資料どころか、この話の類話の収録された資料を確認することもできなかった。

今回は、前回至らなかつた箇所を再検討する意味も込めて、この「タニシ」の話を中心に、坪田の童話化昔話を考察していきたいと考えている。

なお、「童話」という語は昔話と同様の意味に使用されていた

こともあるが、坪田本人が児童向けに書かれた読み物を童話と称しているため、本論もそれにならない児童向けの創作読み物を童話と呼称する。また、坪田の作品は、原典となる昔話を元に童話として再構成された作品であるが、「再話」という語は、原典をできるだけ変えないようにわかりやすく直したものと、という意味合いが強いと考えるため、坪田のように作家の改編の多いものは「童話化昔話」として定義することとする。

一、坪田の童話化昔話

まず、坪田の略歴を紹介する。

小説家、童話作家。一八九〇（明治二十三）年岡山県に生まれる。

一九〇八（明治四十二）年に早稲田大学文科予科に入学。在学中小川未明に師事する。一九二五年に一九二六年『正太の馬』を出版。同年『赤い鳥』に最初の童話『河童の話』を発表。その後『赤い鳥』に四十篇あまりの作品を発表する。一九三九年翌年新潮社文芸賞を受賞。一九五四年に『坪田譲治全集』全八巻が刊行され、この全集で翌年に芸術院賞を受賞。一九五一年に童話の研究・創作の集まりとして『びわの実会』を創立する。一九六三年には雑誌『びわの実学校』を創刊。これらによって後進の童話作家を多く育てる。

一九八二（昭和五十七）年七月死去。九十二歳。
坪田は、自身の童話化昔話について『新百選』の序文で以下のように述べている。

昔話の方は、江刺郡昔話以来、本職の童話がおろそかになるくらい、読んだり書いたりしました。一時は、彼は童話を書けないもので、昔話に逃避したのだと言う人がありました。しかし今、こうして、私の昔話を百編まとめて本にすることが出来るというのは、たとえようのない喜びであります。喜びではありませんが、百パーセントの喜びではありません。それというのも、わが国の昔話には、二つの源があります。昔の本から取り出して来るやり方と、遠い田舎の辺鄙な村のとしよりから聞き出して来る方法とであります。私が魅力にとりつかれた江刺郡昔話というのは、この後者なのであります。今、わが国の昔話は、その八、九分通りは採集しつくされたと思いますが、その功績は柳田国男先生と、その一門の方々の努力によるものであります。そして、私などは、その努力に寄生し、これを無断で借用し、このような本をつくったという次第であります。無遠慮に喜ぶわけには行きません。ここに謹んで、柳田国男、佐々木喜善、関敬吾その他、沢山の日本の昔話を採集された方々に、厚く御礼を申し上げます。

この序文からわかるように、坪田の童話化昔話は資料を参考にして書かれていた。坪田以前に童話化昔話を執筆していた石井研堂や高野辰之、坪田の後進で生涯にわたり多くの童話化昔話を書いた松谷みよ子や寺村輝夫などは、自ら地方を巡って土地の老人から話を聞くなど採取にも力を入れていたが、坪田は自ら採取を行った記録はない。坪田に先立つ昔話採取者の時代は昔話の資料自体が少なく、坪田の後進の作家の時代は昔話採取のノウハウが集まり、フィールドワークが重視され始めた時代であったが、坪田が童話化昔話を書き始めた時代は、ある程度資料がそろっているおり、フィールドワークを行うにはまだ敷居が高かったため、とくに自ら採取することにこだわる必要はなかったという事情も考えられる。

また、坪田の関心はあくまで昔話をどのようにして後世に残すか、昔話をどのように童話としてアレンジするのか、ということであり、昔話の分布や伝播などの学問的な側面に対しての関心は薄かったということも考えられる。

なお、坪田の童話化昔話集で最初のものは、『鶴の恩がへし 日本昔話その一』（以下、『鶴の恩がへし』）であるが、それ以前の『善太と三平』という童話集の中に「お地蔵様」「みそぎざい」という童話化昔話が収録されているなど、『鶴の恩がへし』以前から童話化昔話を執筆していることが確認できる。ただ、『鶴の恩がへし』以降、坪田の執筆活動において童話化昔話が大きな

位置を占めるようになっており、『鶴の恩がへし』が重要なターニングポイントにあたる作品集であったのは間違いない。

二、「タニシ」の概要

「タニシ」は、坪田による童話化昔話のひとつである。概要は以下のとおりである。

- ・あるところに身寄りのない五人の兄弟がいた。
- ・ある日、末の弟が田でふたつのタニシを見つけ、それを流して飼うことにした。
- ・その日から、兄弟が仕事を終えて家に帰ると、誰かが夕食の用意をしてくれるようになった。
- ・不思議に思った末の弟は、早めに帰ってこっそり様子进行がうことする。やがて家の中にふたりの娘が現れ、歌いながら食事の用意を始めた。
- ・弟が家に入ったとき、娘の姿はもうなかった。あくる日、こんどは兄弟全員で早く帰り、娘の姿が現れると同時に家に入り、娘を取り囲む。
- ・素性を聞いてみると、ふたりは山の向こうの村に住んでいた姉妹でしたが、父母のいうことをきかなかったためタニシのからに入れられて道の草の中に捨てられた。そこをワシにくわえられてここまで連れてこられました。兄弟に拾われ親切にしても

らったお礼に毎日常事の支度をしていたということだった。

・ふたりの素性をきいた兄弟はかわいそうに思い、ふたりを家族（兄弟）としていっしょに仲良く暮らした。

この話の類話は、『日本昔話大成』『日本昔話通観』にも掲載されていない。形式としては異類婚姻譚に近いと思われるが、日本列島の異類婚姻譚は「蛇女房」など「異類が人間に化けている」というものが多く、「人間が異類に変えられている」というものは比較的少ない。また、婚姻という形ではなく、五人の兄弟はあくまでタニシの姉妹を兄弟として家族に迎えるという展開も珍しい。

「タニシ」は、『坪田讓治全集十一』によれば、一九四七（昭和二十二年）年の『歌のじょうずなカメ 日本昔話その二』（以下、『歌のじょうずなカメ』）に収録されたのが初出ということになっている。しかし、実際はそれよりも早い段階で、『善太と三平』に収録されていることが確認できる。坪田が童話化昔話集を出す前に書かれた作品で、比較的古い作品であると言える。「タニシ」は、『善太と三平』に掲載されたのち、『歌のじょうずなカメ』に再録され、その後『新百選』の中の一編として収録されたというのが正確である。『善太と三平』に収録されている「タニシ」には、文末に「臺灣蕃社傳説より」と記載され、台湾の少数民族に伝わる昔話を基にした作品であることが明記されている。そのことから、坪田は「日本の昔話」を冠する作品集に、

台湾の昔話を基にした作品を収録していたことになる。

台湾は戦前までは日本領であり、台湾を日本の一部として見るのは当時としてはありえない考え方ではない。それ故、坪田が台湾の昔話も日本の昔話の一種と考えていたのであれば、とくに問題は無い。しかし、その可能性は低いのではないかと考える。

第一に、「タニシ」が再収録された『歌のじょうずなカメ』が発行された一九四七（昭和二十二年）年には、すでに台湾は日本での領土ではなくなっており、この時点で台湾を日本の一部として扱っていたということは考えにくい。

第二に、台湾を日本の一部として見ていたのであれば、台湾のほかの昔話や朝鮮半島の昔話などが入っていてもおかしくはないが、それが無いということが挙げられる。表にあるように、『新百選』収録の昔話はほぼ日本列島のものであり、台湾や朝鮮半島、さらに言えばアイヌなどの昔話もない。

以上の理由から、坪田は「タニシ」執筆当初から台湾、少なくとも台湾の少数民族を日本の一部として見てはいなかったと考えられる。

坪田は、『新百選』の各章に序文を書いており、それぞれの章に収録されている昔話に関して所見を述べており、この「タニシ」に関しては以下のように記している。

『タニシ』（『タニシ長者』参照）は五人兄弟の親切によって

娘にかえる話ですが、このように動物の姿にさせられた人間を救うものは、つねに信仰心や愛情のたまものでした。
〔新百選〕「兄弟ものがたり」章序文

坪田は、「タニシ」が台湾の昔話であることに言及していない。また、『新百選』の章序文で題材とした昔話がどこの地域で採取されたものなのかを注記しているものがほとんどであるが、『タニシ』に関してはそれも行われていない。

採取地明記の例

『タニシ長者』(岩手) 『三人の大力男』(岩手) 『うりひめこ』(秋田) も、やはり異常な誕生をし、あるいは異常な成長ぶりを示します。この他昔話の世界では人の体の一部分(かかと、すね)から生まれたり、動物の姿で生まれるものが幾例もあります。

この採取地明記が行われていないのは、全収録作品中「タニシ」と「桃太郎」の二作品のみである。このことから、坪田は「タニシ」が台湾の昔話を基にしているということを意図的に隠しているのではないだろうか、と考えられる。

坪田がなぜ、日本の昔話と銘打った童話化昔話集に本人も日本国外と認識していた台湾の昔話をあえて入れたのかは不明である。坪田は作家であり研究者ではないが、海外の昔話である

と認識しながら日本の昔話として紹介をするという態度は不誠実と評価されても仕方がないのではないだろうか。

三、「タニシ」の原典

「タニシ」の原典を特定する前に、坪田が童話化昔話を書く際、原典としていた資料の傾向を確認する。先述の通り、坪田の童話化昔話はほとんどが文献資料を基にしている。

まずは、坪田が主にどのような資料を参考としていたのかを確認する。坪田の初期の童話化昔話集である『鶴の恩がへし』『歌のじょうずなカメ』には合計四十六話の童話化昔話が収録されている。この原典の資料がなにかということは明記されていないものの、『新百選』再録の際に示された採取地をヒントに、執筆当時発行されていた資料を確認し、その内容を坪田の作品と比較することにより、原典を特定することが可能となる。その原典を確認すると、参考にされた資料は、その数に対して少なくとも十四種類であることが確認できる(論末表参照)。なお、柳田の『日本昔話集(上)』は柳田による童話化昔話集であり、柳田自身が参考にした原典が存在する。今回は、あくまで「坪田が童話化にあたって参考にした資料」を問題するため、柳田の『日本昔話集(上)』を原典とする。

また、資料から引いた原典の数にも偏りがあり、それぞれ合計は以下のようになっている。

『日本昔話集(上)』十一話

『聴耳草紙』八話

『加無波良夜譚』『昔話研究』一卷 各四話

『老嫗夜譚』『旅と伝説・昔話特集号』『磐城昔話集』各三話

『紫波郡昔話集』『甌島昔話集』各二話

その他 各一話

『日本昔話集(上)』『聴耳草紙』の二冊がとくに多いことがわかり、「タニシ」の初出『善太と三平』に同時収録された「お地蔵様」「みそさざい」も、『聴耳草紙』が原典である。これらは、当時としても決して入手・閲覧が難しかった資料ではない。⁽²⁾このことから、「タニシ」の参考とした資料も、比較的容易に読むことが可能な資料であった可能性が高いと思われる。

以上を踏まえ、当時入手が比較的容易だった資料で「タニシ」の内容に近いものを探した結果、「タニシ」の原典として可能性が高いのは佐山融吉・大西吉寿著『生蕃伝説集』収録の「田螺の美人」およびそれを参照にしてより児童にわかりやすいように改作した澁澤壽三著『台湾童話五十篇』に同タイトルで収録された作品と考える。これらは、タニシとなった女性が姉妹ではなくひとりであること、タニシにされた理由が両親による虐待であること以外はほぼ「タニシ」と同じ展開である。なお、『生蕃伝説集』では、兄弟に助言をする村の老人が登場するが、

『台湾童話五十篇』ではその場面は省かれている。この老人は「タニシ」にも登場していないことから坪田が参考にしたのは『台湾童話五十篇』のほうである可能性は高いと思われる。

なお、この台湾の昔話と同様の話として、中国の志怪小説「白水素女」⁽³⁾が挙げられる。この小説ではタニシの女性が天帝の使いである天女であり、最終的に天に帰るということ、男性に兄弟がないなどの違いはあるが拾ったタニシが留守の間に女性の姿となって食事を用意する、という基本的な流れはほぼ「田螺の美人」系統の話である。「田螺の美人」は台湾の少数民族に「白水素女」が伝わり語られるようになった昔話という可能性も考えられる。そのため、「タニシ」は間接的に中国古典の翻案となっている可能性もあると言える。

以上より、坪田が参照とした資料を確認した。しかし、いずれの資料もタニシの女性はひとりだけであり、姉妹としている資料は見つからなかった。そのため、タニシを姉妹としたのは坪田の改作ではないかと考える。ほかの坪田の改作と考えられるのは、タニシにされた理由が父母の虐待ではなく父母の言いつけを守らなかつた罰という箇所であるが、そこは児童向けということを考慮し表現をやや控えめにしたものと推測できる。しかし、タニシを姉妹とした理由に関しては現時点では仮説を出すことはできない。なにを思っただけで坪田はこのような改作を行ったのかということは今後の課題としたい。

四、昔話の「タニシ」

「タニシ」は台湾あるいは中国文化圏の昔話であり、この話の類話は、『日本昔話大成』『日本昔話通観』にも掲載されていない。しかし、山口県で採取された昔話として、当時山口大学の教授であった松岡利夫の資料が挙げられる。松岡は採取した資料に手を加え、山口銀行の社内誌に連載という形で掲載していたが、後に『周防・長門の民話』（第一集・第二集）『防長の昔話』としてまとめられている。「タニシ」の類話は『周防・長門の民話第二集』、『防長の昔話』に「たにしの姉妹」というタイトルで掲載されている。この資料は、坪田の「タニシ」よりも後に発表されたため、坪田が「タニシ」を書く際に参考にした可能性はない。しかし、日本における「タニシ」の類話として貴重なので、ここで取り上げる。概要は以下の通りである。

- ・むかしあるところにふたりの兄弟が住んでいた。
- ・ある日、弟が田んぼでふたつのタニシをみつけ、それを流して飼うことにする。
- ・その日から、仕事から帰ると誰かが夕食の用意をしてくれるようになる。
- ・兄弟は不思議に思い、家のそばの木にのぼって様子をうかがうことにする。そのうちに、ふたりの女性が現れ夕食の準備をはじめた。

・ふたりが急いで家に入り、ふたりにわけをたずねると、ふたりは山の向こうの村に住んでいた姉妹で、親のいうことを聞かなかつたため、母親に「そんなにいうことを聞かないとたにしになってしまふよ」と言われ、「たにしになってもかまわないと口答えしたところ、そのままたにしになってしまった。

・あまりの恥ずかしさに、この村に逃げてきたところを弟に拾われました。夕方だけはなぜか元の姿に戻れるため、恩返しとして夕食の準備をしていたといた。

・兄弟は姉妹をあわれに思い、恵比寿様に姉妹を元の姿に戻してもらおうようお願いした。やがて願いはかなえられて姉妹は人間に戻り、それぞれ兄弟と縁組をして幸せになった。

基本的な流れは同一なものの、坪田の作品とはいくつか差異が見られる。主なものとして以下があげられる。

- ・兄弟の人数が異なる。坪田「タニシ」は五人なのに対し「たにしの姉妹」では二人。
- ・姉妹がたにしになった経緯が坪田「タニシ」よりも具体的。
- ・姉妹を元に戻す経緯が描かれる。
- ・兄弟と姉妹が結婚する。

なお、「タニシ」系統の昔話が確認できた日本の資料は、すべ

て坪田の「タニシ」以降に発行された資料に掲載されている。そのため、「坪田の作品が民間で昔話として語られるようになった」という可能性も考えられる。「タニシ」と「たにしの姉妹」には、台湾の「田螺の美人」中国の「白水素女」と異なり、「タニシ」にされた女性がふたり（姉妹）であるという重要な点で共通点があり、その可能性は高いと思われる。前述の際も、兄弟がふたりというのは最後に結婚する際、二人姉妹に合わせる形で二人兄弟に変化したのではないかと考えられるなど、そこまですべて大きな差異ではないかと思われる。

ただ、現在確認できる資料は、三か所で三人の話者から採取した三つの話を統合・編集したものであるため本来語られていた型は不明であり、松岡がどの程度手を加えたのかという問題がある。また、「たにしの姉妹」が採取された地域は決して狭い範囲ではなく、「タニシ」が昔話として語られるようになったのであれば、なぜ周防地方のそれなりに広い範囲に広まったのかという疑問も生じる。書籍で書かれた話が語りとして広まる背景には、口演童話などの影響が考えられるが現時点ではこれに関する資料にはたどりつけていない。

「タニシ」がどのようにして「たにしの姉妹」として周防で語られるようになったのかということは今後の課題としたい。

五、おわりにかえて

坪田謙治「タニシ」は、台湾の少数民族の昔話が元であること、坪田の作品が民間で昔話「たにしの姉妹」として語られるようになった可能性が指摘できた。「タニシ」の原典である「田螺の美人」のルーツは中国の志怪小説であるとも考えられるが、これらの仮説の通りであれば、中国志怪小説（文献）↓台湾の昔話（口承）↓『台湾童話集』（文献）↓坪田「タニシ」（文献）↓山口県（周防地方）の昔話（口承）と変化をしいったことになる。元となった文献資料をほぼ辿ることができるという点において、文献と口承の関係を考察するうえで興味深い資料であると思われる。

「タニシ」が日本の昔話として語られるようになったのは、坪田が『新百選』などで日本の昔話として紹介したことが大きいと思われる。坪田が台湾の昔話をあえて日本の昔話として紹介した理由は現時点では不明である。坪田はタニシの女性を姉妹にするなど比較的多く手を加えている。このことから、坪田はこの話に対して思い入れがあり、それ故に台湾の昔話と知りながらも日本の昔話として扱ったのではないかと推測する。坪田がこの「タニシ」に対してどのような思いを抱いていたのかということ考察することを、今後の課題としたい。

注

(1) 藤井倫明「童話化された昔話―坪田讓治の『新百選日本むかしばなし』―」『口承文芸研究』第四十二号二〇一九

(2) なお、『鶴の恩返へし』(一九四三 新潮社)序文にて、坪田は柳田国男と面会し、その際に昔話集や雑誌といった資料を百合地受けたことを記している。この際に譲り受けた資料の詳細は不明であるが、坪田が参考にしてきた資料は柳田から譲り受けたものである可能性も高いと思われる。

(3) 「白水素女」は、元々『搜神記』収録作だったとする説と、『搜神後記』だったとする説とがある(先防幸子・森野繁夫編『搜神後記』二〇〇八 白帝社)。

(4) 『周防長門の民話二』(一九六九 未来社)では、熊毛郡・都濃郡・佐波郡で、それぞれ採取したものとし手記録されている。

(5) 櫻井美紀「昔話「味噌買橋」の出自―その翻案と受容の系譜―」『口承文芸研究』第十五号 一九九二

参考資料

坪田讓治の著作

『善太と三平』一九四〇 童話春秋社

『鶴の恩がへし』一九四三 新潮社

『歌のじょうずなかめ』一九四七 新潮社

『新百選日本むかしばなし』一九五七 新潮社

『坪田讓治全集十一』一九七七 新潮社

昔話等資料

佐山融吉・大西吉寿著『生蕃伝説集』一九二三 杉田重蔵書店

澁澤壽三著『台湾童話五十篇』一九二六年 第一出版協会

松岡利夫『周防・長門の民話二』一九六九 未来社

松岡利夫『防長の昔話』一九六九 山口銀行厚生会

先防幸子・森野繁夫編『搜神後記』二〇〇八 白帝社

論文

櫻井美紀「昔話「味噌買橋」の出自―その翻案と受容の系譜―」

『口承文芸研究』第十五号 一九九二

中島利郎「台湾最初の児童文学作家・西岡英夫研究序説―大正期・

台湾における「お伽事業」の創始」『岐阜聖徳学園大学紀要』第

五十四集 二〇一五

(ふじい・みちあき/立正大学文学部文学科教務助手)

坪田童話化昔話・題名	収録	原典	原題
かしこくない兄と、悪がしこい弟	『歌のじょうずなカメ』(1947.11)	『江刺郡昔話』(1922)	或る兄弟の話
海の水はなぜからい	『鶴の恩がえし』(1943.7)	『老嫗夜譚』(1927)	鹽吹臼
親切なおじいさん	『鶴の恩がえし』(1943.7)	『老嫗夜譚』(1927)	爺と黄金壺
木仏長者	『歌のじょうずなカメ』(1947.11)	『老嫗夜譚』(1927)	木佛長者
松の木の伊勢まいり	『鶴の恩がえし』(1943.7)	『日本昔話集(上)』(1930)	松子の伊勢参り
牛方と山姥	『鶴の恩がえし』(1943.7)	『日本昔話集(上)』(1930)	牛方と山姥
山の神のうつぼ	『鶴の恩がえし』(1943.7)	『日本昔話集(上)』(1930)	山の神の鞆
だんご浄土	『鶴の恩がえし』(1943.7)	『日本昔話集(上)』(1930)	団子浄土
サル正宗	『鶴の恩がえし』(1943.7)	『日本昔話集(上)』(1930)	猿正宗
サルとネコとネズミ	『鶴の恩がえし』(1943.7)	『日本昔話集(上)』(1930)	猿と猫と鼠
むかしおのキツネ	『鶴の恩がえし』(1943.7)	『日本昔話集(上)』(1930)	狐が笑う
片目のおじいさん	『鶴の恩がえし』(1943.7)	『日本昔話集(上)』(1930)	片目の爺
金剛院とキツネ	『鶴の恩がえし』(1943.7)	『日本昔話集(上)』(1930)	金剛院と狐
クラゲ骨なし	『鶴の恩がえし』(1943.7)	『日本昔話集(上)』(1930)	海月骨無し
米良の上ウルシ	『鶴の恩がえし』(1943.7)	『日本昔話集(上)』(1930)	米良の上漆
タニシ長者	『鶴の恩がえし』(1943.7)	『聴耳草紙』(1931)	田螺長者
天人子	『鶴の恩がえし』(1943.7)	『聴耳草紙』(1931)	天人子
箕づくりと山姥	『鶴の恩がえし』(1943.7)	『聴耳草紙』(1931)	箕の輪曲げ
ネズミのすもう	『鶴の恩がえし』(1943.7)	『聴耳草紙』(1931)	鼠の相撲
古屋のもり	『鶴の恩がえし』(1943.7)	『聴耳草紙』(1931)	古屋の漏
お地蔵さま	『歌のじょうずなカメ』(1947.11)	『聴耳草紙』(1931)	地藏譚
キツネとカワウソ	『歌のじょうずなカメ』(1947.11)	『聴耳草紙』(1931)	狸と狐
ミノサザイ	『歌のじょうずなカメ』(1947.11)	『聴耳草紙』(1931)	ミノサザイ
山姥と小僧	『歌のじょうずなカメ』(1947.11)	『加無波良夜譚』(1932)	山姥と小僧
歌のじょうずなカメ	『歌のじょうずなカメ』(1947.11)	『加無波良夜譚』(1932)	歌を歌ふ亀
ウグイスのほけきょう	『歌のじょうずなカメ』(1947.11)	『加無波良夜譚』(1932)	ほけきょう
スズメのヒョウタン	『歌のじょうずなカメ』(1947.11)	『加無波良夜譚』(1932)	雀の恩返し
わらしべ長者	『鶴の恩がえし』(1943.7)	『安芸国昔話集』(1934)	藁しべ長者
ネコとネズミ	『鶴の恩がえし』(1943.7)	『旅と伝説』7年12月号(1934)	猫はなぜ鼠を捕るか
サルとお地蔵さま	『鶴の恩がえし』(1943.7)	『旅と伝説』7年12月号(1934)	爺様と猿
ネズミの国	『鶴の恩がえし』(1943.7)	『旅と伝説』7年12月号(1934)	豆こ拾つて鼠口に呉れた話
ものいうカメ	『鶴の恩がえし』(1943.7)	『旅と伝説』7年12月号(1934)	金くづと糞くづ
沢右衛門どんのウナギつり	『鶴の恩がえし』(1943.7)	『昔話研究』一卷第二号(1935)	澤右衛門どんの斑鱧釣り
ツルの恩返し	『鶴の恩がえし』(1943.7)	『昔話研究』一卷第二号(1935)	鶴の機織り
モズとキツネ	『歌のじょうずなカメ』(1947.11)	『昔話研究』一卷第二号(1935)	百舌鳥と狐
天狗のかくれみの	『歌のじょうずなカメ』(1947.11)	『昔話研究』一卷第三号(1935)	隠れ裏
一寸法師	『鶴の恩がえし』(1943.7)	『磐城昔話集』(1942)	一寸法師
権兵衛とカモ	『歌のじょうずなカメ』(1947.11)	『磐城昔話集』(1942)	権兵衛と鴨
初夢と鬼の話	『歌のじょうずなカメ』(1947.11)	『磐城昔話集』(1942)	初夢を教へないで得した話
灰なわかつたば	『歌のじょうずなカメ』(1947.11)	『紫波郡昔話集』(1942)	あぐな千縄
頭にカキの木	『歌のじょうずなカメ』(1947.11)	『紫波郡昔話集』(1942)	頭さ柿の木
籠宮と花売	『歌のじょうずなカメ』(1947.11)	『喜界島昔話集』(1943)	籠神と花売
おじいさんとウサギ	『歌のじょうずなカメ』(1947.11)	『直入郡昔話集』(1943)	鬼の浄土
姉と弟	『歌のじょうずなカメ』(1947.11)	『甌島昔話集』(1944)	姉と弟
ネズミとトビ	『歌のじょうずなカメ』(1947.11)	『甌島昔話集』(1944)	旅人馬
タニシ	『歌のじょうずなカメ』(1947.11)	『生蕃伝説集』(1923) 『台湾童話五十篇』(1926)	田螺の美人